

栃木県埋蔵文化財調査報告第343集

甲塚古墳

—重要遺跡範囲確認調査—

2012.3

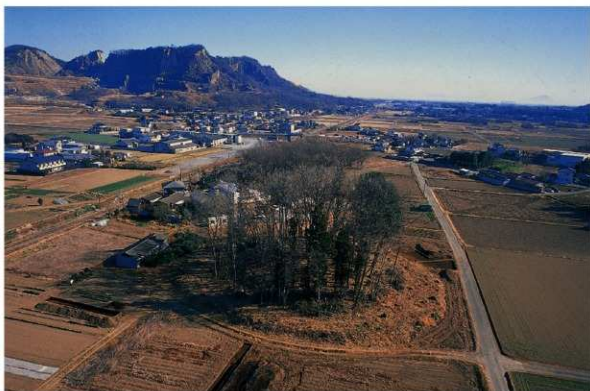
栃木県教育委員会
栃とちぎ未来づくり財団

かぶと づか こ ふん
甲 塚 古 墳

－重要遺跡範囲確認調査－

2012.3

栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ未来づくり財団



甲塚古墳遠景（西から）



甲塚古墳全景（上空から）

序

下都賀郡岩舟町は栃木県南西部に位置しており、足尾山地の最南端で、関東平野との境にあたります。ここは、北関東の東西を結ぶ交通の要衝でもあり、古来より東西文化の交流する地域でもありました。

古墳時代には、岩舟町域に多数の群集墳が造られ、本古墳は昭和 16 年刊行の『紀元二千六百年記念古墳調査』に「兜塚古墳」として登載されています。それ以来、70 年余を経ても古墳は良く保存されて今日に至っております。この古墳では、これまで埴輪が採集されてきましたが、発掘調査の行われたことがなく、その詳しい内容は不明なところが多いものでした。

栃木県教育委員会では、甲塚古墳の範囲や遺構の保存状態等を解明することを目的に、今年度範囲確認調査を行うこととしました。

調査の結果、古墳の形態やその規模が明らかになり、多くの成果を得ることができました。

本報告は、その結果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって、郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御指導・御協力をいただきました岩舟町教育委員会等の関係機関、地元地権者をはじめとする関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

栃木県教育委員会

教育長 須 藤 稔

例 言

1. 本書は栃木県下都賀郡岩舟町壺岡地内に所在する甲塚古墳の重要遺跡範囲確認調査の報告書である。
2. 調査は、栃木県教育委員会が財団法人とちぎ未来づくり財団に委託して実施した。
3. 発掘調査・整理作業・報告書作成作業までの担当者は以下のとおりで、執筆・編集は津野が行った。
調査部 部長 初山 孝行 部長補佐兼調査第一担当リーダー 中山 晋
調査第一担当 係長 津野 仁 調査嘱託員 永井 三郎
4. 調査・整理作業にあたり、以下の委託業務を実施した。
伐採作業・表土除去：株式会社 福田土木 測量・航空写真撮影：中央航業株式会社
5. 発掘調査の実施、整理作業・報告書作成にあたり、次の諸氏・諸機関より御指導・御協力を賜りました。
岩舟町教育委員会・酒寄雅志・竹澤 謙・橋本澄朗・秋本陽光・尾林徳也・大島定一・毛塚孝行・
島崎周二・島田多三郎・末吉和子・鈴木邦一・堀江久雄・山口朝次・渡辺明
6. 発掘調査、整理作業・報告書作成の参加者は次のとおりである。(五十音順)
(発掘作業員) 五十嵐祐子・石橋 宏・石本留廣・大久保保江・大豆生田三男・笠野 大・栗原允久・
高山文雄・寺内一年・時田 正・林 勝彦・星野 薫・横田敏夫・若泉孝子
(整理補助員) 河又智美・田崎訓子・塚田幸枝・橋本晶江
7. 本遺跡の概要については、現地説明会資料等で報告されているが、本書をもって正式報告とする。
8. 本遺跡の出土遺物・資料類は、財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターにて保管している。

凡 例

1. 岩舟町甲塚古墳の略称は「I F-KB」である。
2. 墳丘測量図は世界測地系の座標に基づき、標高は海拔標高である。
3. 本報告掲載の遺物の縮尺は図面の脇に示した。埴輪・土器の実測図は縮尺 1/3、鉄製品は 1/2 である。埴輪実測図のトーンは赤彩を示す。拓影は内面を断面の左、外面を右に示した。

目 次

序・例言・凡例・目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
1. 調査の方法	1
2. 調査の経過	1
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺構と遺物	6
第1節 墳丘	6
1. 墳丘規模	6
2. 墳丘上の石	7
第2節 周濠	7
第3節 遺物	14

1. 周壕出土遺物	14
2. 墳丘採集遺物	23
第4章 調査の成果	31
第1節 甲塚古墳の墳形・規模・時期と類例	31
第2節 出土埴輪の傾向と唐沢山ゴルフ場埴輪窯との関係	32
第3節 地域勢力としての甲塚古墳	33
写真図版（遺構・遺物）	

挿図目次

第1図 甲塚古墳の位置	2
第2図 周辺の遺跡	4
第3図 甲塚古墳周辺の旧地図	6
第4図 甲塚古墳墳丘測量図	6
第5図 1トレンチ平面・土層・遺物出土状況図	9
第6図 2トレンチ平面・土層・遺物出土状況図	10
第7図 3トレンチ平面・土層・遺物出土状況図	11
第8図 4トレンチ平面・土層・遺物出土状況図	12
第9図 5トレンチ平面・土層図	13
第10図 トレンチ出土土門埴輪実測図①・口縁部	15
第11図 トレンチ出土土門埴輪実測図②・口縁部	16
第12図 トレンチ出土土門埴輪実測図③	17
第13図 トレンチ出土土門埴輪実測図④	18
第14図 トレンチ出土土門埴輪実測図⑤	19
第15図 トレンチ出土土門埴輪実測図⑥・基底部	20
第16図 トレンチ出土土門埴輪実測図・形象埴輪実測図	21
第17図 トレンチ出土土師器・須恵器実測図	22
第18図 トレンチ出土土師器実測図	22
第19図 墳丘埴輪採集位置図	23
第20図 墳丘採集土門埴輪実測図①・口縁部	24
第21図 墳丘採集土門埴輪実測図②・口縁部	25
第22図 墳丘採集土門埴輪実測図③	26
第23図 墳丘採集土門埴輪実測図④	27
第24図 墳丘採集土門埴輪実測図⑤・基底部	28
第25図 墳丘採集土門埴輪実測図・形象埴輪・土師器・須恵器実測図	29
第26図 墳丘第一段・第二段の幅	31
第27図 土門埴輪口縁部・基底部の分類と点数	32
第28図 岩舟町域周辺の地域勢力	33

表目次

第1表 周辺の古墳・遺跡	5
--------------	---

写真図版目次

巻頭図版

- 甲塚古墳遠景（西から）
- 甲塚古墳全景（上空から）

図版一 遺構

- 甲塚古墳全景（南から）
- 1トレンチ全景（南西から）

図版二 遺構

- 2トレンチ全景（南東から）
- 1トレンチ土層（北西から）

- 1トレンチ全景（南から）
- 2トレンチ土層（南から）
- 2トレンチ遺物出土状況（東から）

図版三 遺構

- 3・4トレンチと墳丘（南から）
- 3・4トレンチ全景（北から）
- 3トレンチ全景（北から）
- 4トレンチ全景（北から）
- 3トレンチ土層（東から）

図版四 遺構

- 4トレンチ全景（東から）
- 3トレンチ土層（西から）
- 3・4トレンチ土層（南東から）
- 4トレンチ人物埴輪出土状況（北西から）
- 4トレンチ須恵器出土状況（北東から）

図版五 遺構

- 5トレンチ全景（南西から）
- 5トレンチ土層（南西から）
- 5トレンチ墳丘土層（南東から）
- 墳丘裾礫石露出状況（南東から）
- 3・4トレンチ作業風景（西から）

図版六 遺物

- 10図1・4・5
- 11図31～33・36・37・42
- 12図6・9・10・12・17
- 13図29・33～35
- 14図39～41
- 15図1～4

図版七 遺物

- 15図10
- 16図1・4・5・8～11
- 17図1・3・9
- 18図1・2
- 20図1・3・4・6・15・19～21・23・24
- 21図25～27
- 22図4・5

図版八 遺物

- 22図11・12・15
- 23図20～22・25・26
- 24図1～7・9
- 25図1・3～7・9～12

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

甲塚古墳は、『紀元二千六百年記念古墳調査』（1941年刊行）にも記載されており、古くからこの地域の大規模古墳として知られていた。その後、『栃木県史』などでも取りあげられていた。特に、低位置突帯埴輪と呼ばれる特徴的な埴輪は、採集資料をもとにして研究者諸氏に注目されていた。このような中で、本古墳は、『栃木県重要遺跡基本資料整備事業調査報告書』（昭和57年3月刊行）にも選定された。この重要遺跡とは未指定であるが、重要度が高い遺跡で、指定史跡に準じて保護策を講じることを目的に選定している。

しかし、この古墳はこれまでに発掘調査されたことがなく、埴形も円墳が圓場整備前の地割りなどから帆立貝式古墳であるのか、明らかになっていなかった。また、埴丘の測量調査も行われたことがなく、周濠の正確な規模についても不明であった。これらの点に鑑み、本県の重要遺跡に選定した本古墳の実態―埴形や規模―を解明することを目的にして範囲確認調査を実施することになった。

第2節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

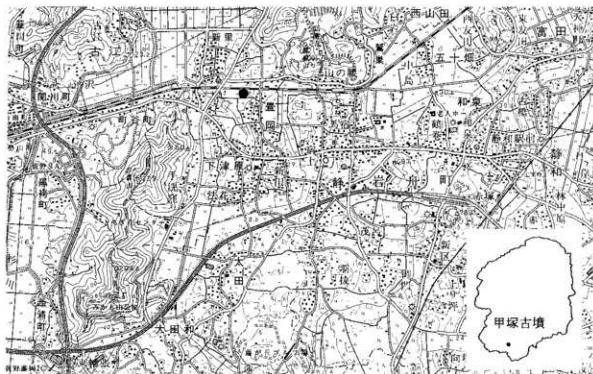
今回の調査は先述のように甲塚古墳の埴形や周濠を含めた規模・範囲の確認を主な目的とした。このために、調査箇所は必要最小限にとどめることとした。埴丘測量については作業委託するが、細部については担当者が現地にて修整することにした。トレンチの設定位置については、県教育委員会文化財課の指導のもと、埋蔵文化財センター内部で協議し、現地の土地利用状況を考慮して策定した。古墳全体図に示したように、埴丘第一段平坦面（基壇・テラス）の南側の部分に帆立貝の突出部状の高まりが確認され、周辺の圓場整備前の地割りでも、突出部が古墳の南東部にみられた。このため、帆立貝式古墳の可能性も含めて、埴丘第一段の高まりの中軸をもって、仮に帆立貝式の場合に埴丘全長が確認できるように主軸を設定した。これが、4トレンチの西側に設定した土層図の位置であり、その延長上に埴頂、さらに北にのびて1トレンチを設定した。本来、1トレンチは設定した位置よりも1mほど東側になるべきであったが、畑に作付けがあり、調査位置を変更せざるをえなかった。また、仮の主軸に直交して東西トレンチを設定すべきであったが、埴丘の東側が駐車場に利用されており、二重周濠の可能性も考慮して最も長くトレンチが設定できる場所にせざるをえなかった。これを5トレンチとし、埴頂を経て、埴丘西側に延長したのが2トレンチである。

埴丘南側は、帆立貝式古墳の可能性を考慮して、突出部の周囲を面的に広く調査して、埴丘第一段と周濠の突出部の有無を確認することにした。

さらに本古墳では、埴丘第一段及び埴丘第二段の斜面において埴輪が相当数散布していた。このため、埴輪の散布状況を把握して、その出土位置と埴輪の種類をもとに、埴丘第二段・埴頂や埴丘第一段に樹立された埴輪を復元する一助とした。

2. 調査の経過

調査前に本古墳は樹木が繁茂しており、埴丘第一段には以前に伐採した木が積み置かれていた。このため、今年度の12月中には、作業委託により繁茂した低木を伐採して、置かれた木を除去して測量できるようにした。



第1図 甲塚古墳の位置

●が甲塚古墳

1月10日には重機により周濠に設定したトレンチの表土を除去して、11日から発掘作業員によって周濠埋土の掘り下げを開始した。しかし、時間的制約や調査部分をできるだけ限定するために、1・2・5トレンチでは表土除去したトレンチの半分のみ埋土を掘り下げることにした。13日にはラジコンヘリによる航空写真撮影を行い、16日からは墳丘南側に設定した3・4トレンチの埋土掘り下げを始めた。この2箇所のトレンチは墳形の確認に係わるために面的に周濠底まで掘り下げることにし、下旬にはほぼトレンチ範囲を掘ることができた。28日には、今回の発掘成果を地元の方々に公表するために、現地説明会を実施した。その後、墳丘に散布する埴輪の出土位置を記録して、採集した。1月31日には調査したトレンチを埋め戻して現地調査を終了した。

整理作業は1月の後半から、出土した埴輪などの洗浄・注記作業などを行い、現地調査の終了した2月以降にトレンチ図の修整作業や出土品の実測を行った。併せて原稿作成や写真の整理を行い、2月下旬に入稿した。3月には校正を行い、報告書刊行の運びとなった。



現地説明会



甲塚古墳全景

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

甲塚古墳のある岩舟町は、足尾山系と関東平野の境に位置している。足尾山系は南北にのびて、この間を浸食谷が入り組んで発達している。山系の南側には台地が広がり、その台地は東に永野川から、西は佐野市の秋山川までの範囲になっている。この間に、栃木市西山田付近のやや広い谷底平野がある。

岩舟町北部の小野寺は浸食谷が大きくなって谷底平野と分類される盆地になっている。その南端の平野部との境にはJR両毛線が東西に走る。両毛線の南側は台地とそれを樹枝状に浸食する幅の狭い谷部からなっている。甲塚古墳は、このように谷底平野の盆地の開口部、台地の最も奥の位置に立地している。小野寺の盆地からは、三杉川が南流して、三義山の西側にあった越名沼に注がれる。また、三義山の東側には岩船山の付近から旧藤岡町域を南流して、渡良瀬川につながる蓮花川が流れている。

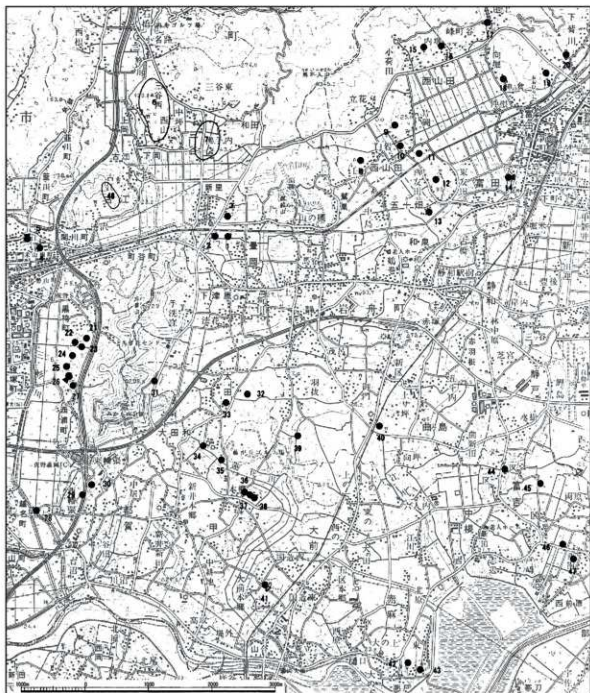
第2節 歴史的環境

ここでは、甲塚古墳と関連する古墳時代後期を中心に周辺の遺跡の様相を概観する。岩舟町域で本古墳の近くで発掘されているのは駒塚古墳である。この古墳は甲塚古墳の西150m程の位置にあって、周堂径54mに復元される円墳で、出土遺物によって7世紀前半を上限におく古墳であると指摘されている。石室は袖無型の横穴式石室で、岩舟石を用いて構築していたが、埴輪は確認されていない。

本古墳の北方の小野寺の盆地には、新屋敷遺跡の古墳、三谷仏手内遺跡の古墳群（1～3号墳）や上岡三谷遺跡の古墳群（1・2号墳）などがある。いずれも山麓の中に築かれた群集墳であって、三谷仏手内遺跡の古墳群では、銅鋼が採集されている（斎藤1993）。かつては仏手内で円墳8基以上、上岡三谷で円墳10基以上が存在した。さらに、盆地を挟んで古江の山麓には円墳が5～6基、石橋の山麓にも2基以上が存在する（前沢1975）。上岡三谷の古墳群では、かつて埴輪なども出土している。このように、甲塚古墳の北方の小野寺の盆地を囲む山には小規模であるが、後期群集墳が環状に点在していた。

岩舟町域では、町の東端で甲塚古墳の東3kmあまりの位置に小野梨根古墳群がある。4号墳が発掘調査されて、墳丘径20m程で、横穴式石室内から鹿角装刀子や大刀・鉄鏃などが出土し、6世紀中頃に比定されている。この古墳群のなかで主墳になるのは3号墳で、墳丘径50m、高さ4～5mを測る。小地域の首長墓と判断されるが、調査が実施されたことがなくて、その時期が明らかでない。

さらに、岩舟町の東部から旧大平町（現栃木市）の北部・富田・西山田付近にも古墳群が存在する。これらの古墳については、栃木県古墳時代勉強会によって継続的な調査が実施されている（栃木県古墳時代勉強会2004・2005・2006・2008）。中山古墳については、出土遺物などから6世紀前半に位置付けられており、片袖型の石室であり、横穴式石室導入期の古墳と指摘されている。また、七廻り鏡塚古墳群では、舟形木棺と組み合わせ木棺が発見された七廻り鏡塚古墳が6世紀前半から中葉に位置付けられ、径27～28m程の円墳を中心に、2号墳・3号墳が6世紀前半の円墳と考えられている。旧大平町域で発掘調査された古墳では、墳丘全長54mのオトカ塚古墳があり、報告では6世紀初めの所産としている（前沢ほか1993）。その時期に関しては、埴輪の編年の確定を待たなければならないが、6世紀代の方後円墳であることから、この小地域の首長墓といえるであろう。



第2図 周辺の遺跡

富田・西山田の周囲山麓部の群集墳を列挙すれば、中山古墳群（6基）・マガキ1号墳（径約20mの円墳）・池上古墳群（5基）・内堀古墳群（円墳2基）・小荷田古墳群（円墳10基）・白岩7号墳（径30mの円墳）・友田茶臼山古墳（径約30の円墳）・白岩西古墳群（円墳7基）などがある。小荷田古墳群・白岩西古墳群では埴輪が採集されており、マガキ1号墳は片袖型の横穴式石室を有している。

岩舟町東部から旧大平町北部の古墳群をみると、富田・西山田の盆地周辺に後期と推定される群集墳があり、オトカ塚古墳・小野集根4号墳という前方後円墳や大型円墳が山麓部から平野部の境に立地している点の特徴といえるであろう。

第1表 周辺の古墳・遺跡

No.	古墳・遺跡名	No.	古墳・遺跡名	No.	古墳・遺跡名	No.	古墳・遺跡名
1	甲塚古墳	13	小野里根古墳群	25	ヘビ塚遺跡	37	松塚古墳
2	駒塚古墳	14	オトカ塚古墳	26	ムジナ塚遺跡	38	板塚古墳
3	新屋敷遺跡	15	小荷田古墳群	27	追手古墳	39	三ツ塚古墳群
4	米山東古墳	16	内船古墳群	28	柳成寺古墳	40	本郷1遺跡
5	米山古墳	17	池上古墳群	29	後藤七ツ塚古墳群	41	大前神社古墳群
6	上岡三谷遺跡	18	七廻り古墳群	30	幡張古墳群	42	赤坂古墳群
7	三谷仏手内遺跡	19	中山(将門霊神)古墳	31	犬石古墳群	43	赤坂愛宕塚古墳群
8	白岩西古墳群	20	マガキ1号墳	32	比佐尾塚古墳	44	大杉山古墳
9	片岡山古墳群	21	黒崎南遺跡	33	中塚古墳	45	六地藏古墳
10	白岩7号墳	22	黒崎台1遺跡	34	蓮花古墳	46	蛭沼愛宕塚古墳
11	茶臼山1号墳	23	黒崎台遺跡	35	白塚古墳	47	長島塚古墳
12	友田茶臼山古墳	24	台古墳	36	柳塚古墳	48	古江古墳群(仮称)

旧藤岡町域において、古墳時代後期の調査事例は少ない。甲塚古墳に最も近い古墳群として南約2.7kmの位置にある犬石古墳群がある。三義山の東山麓に立地し、径10m余りの6基の円墳からなる。この古墳は蓮花川の右岸にあるが、その下流にはヨトウチ古墳群(3基の円墳)や板塚古墳・松塚古墳・梅塚古墳を合わせた畑中古墳群、大前神社古墳群(推定前方後円墳1基・円墳2基)などがある。調査されたものがないが、多くは後期古墳と考えられている。

三義山を挟んだ佐野市の東部では、多くの後期古墳群が調査されている。群集墳としては三義山の西麓で、越名沼との間の狭い範囲に黒崎台遺跡・ヘビ塚遺跡・ムジナ塚遺跡などがある。黒崎台遺跡では、古墳時代後期の円墳等30基、小石室などが発見され、すべて円墳であった。特に銅・鉄製の杓は全国的にも稀なものである。ムジナ塚遺跡では30m程の前方後円墳や帆立貝式古墳が確認されている。この地域では後期古墳に前方後円墳が少ないことから、小地域の首長層の墓であったと考えられる。しかし、これらの古墳では、小型の円筒埴輪のみが用いられているのも事実である。さらに、三杉川を挟んだ北西には、帆立貝式の埴形で、6世紀中葉以降の所産とみられる米山古墳がある。大型の円筒埴輪や蓋の埴輪などが発見されており、群集墳の被葬者とは性格が異なっている。

このほか、生産遺跡として唐沢山ゴルフ場埴輪窯址が西約4.5kmの位置にある。また、三義山周辺で古墳時代後期には須恵器生産を行っていたことが考えられている。

参考文献

- 大川 清 1963『栃木県佐野市安蘇山麓 古代窯業遺跡』佐野市教育委員会
- 斎藤 弘 1993『岩舟町三谷佛手内出土の銅鋼』『唐澤考古』12 唐澤考古会
- 鈴木 勝・山ノ井清人 1981『駒塚古墳』『県営園場地内遺跡発掘調査報告書』栃木県教育委員会
- 常川秀夫 1988『小野里根古墳群4号墳』岩舟町教育委員会
- 栃木県古墳時代勉強会 2004『中山(将門霊神)古墳調査報告』『栃木県考古学会誌』第25集
- 栃木県古墳時代勉強会 2005『中山(将門霊神)古墳調査報告2』『栃木県考古学会誌』第26集
- 栃木県古墳時代勉強会 2006『大平町茶臼山1号墳測量調査報告』『栃木県考古学会誌』第27集
- 栃木県古墳時代勉強会 2008『大平町白岩7号墳測量調査報告』『栃木県考古学会誌』第29集
- 橋本澄朗 2003『古墳時代』『藤岡町史 資料編 考古』藤岡町史編さん委員会
- 前沢輝政 1975『下野の古代史(下)』有峰書店
- 前沢輝政・田村允彦・市橋一郎 1993『オトカ塚古墳』大平町教育委員会

第3章 遺構と遺物

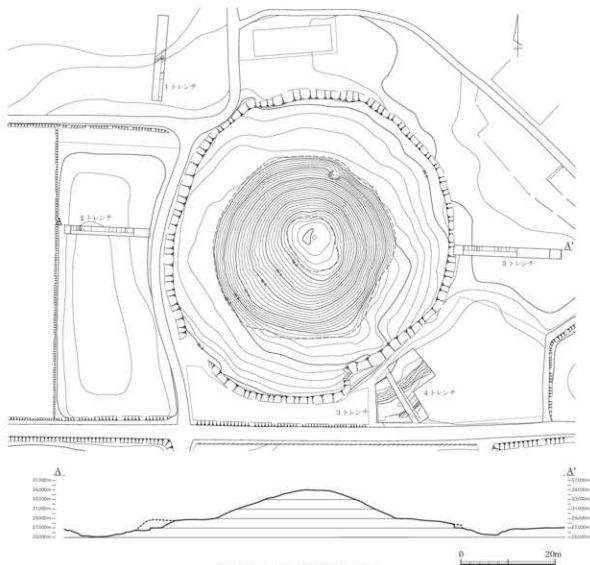
第1節 墳丘

1. 墳丘規模

本古墳は、以前から円墳か帆立貝式古墳と指摘されてきた。これは、岡場整備前の地割りや墳丘南側の高まりによるものと思われる。今回、突出部と想定される墳丘南側を面的に調査した結果、墳丘第一段の立ち上がりが丸味を帯びていたことから、円墳であると考えられた。墳形の把握を第一義的な目的にしたことと、土地利用の制約から直交したトレンチが設定できなかったが、トレンチ調査と測量調査で明らかになった古墳の規模を示すと、以下のようなものである。



第3図 甲塚古墳周辺の旧地割図



第4図 甲塚古墳 墳丘測量図

周濠外周上端径：94.8 m（2トレンチ・5トレンチによる）、92.0 m（1トレンチ・4トレンチによる）

墳丘第一段下端径：78.1 m（2トレンチ・5トレンチによる）

墳丘第二段下端径：39 m（測量結果による）

墳丘第一段上端径：最大 63 m（測量結果による、残存現況）

墳丘第一段上端幅：最大 13.5 m（測量結果による、残存現況）

周濠上端幅：6.5～13.6 m（2～5トレンチによる）

周濠底面から墳丘第一段までの高さ：2.5～3.4 m（1～5トレンチ、現況による）

周濠底面から墳丘高さ：9.3～9.8 m（1～5トレンチ、現況による）

現地表から墳丘の高さ：8.0 m（測量結果による、残存現況）

第一平坦面から墳丘の高さ：5.7～7.2 m（測量結果による、残存現況）

墳丘にはトレンチ調査を実施していなかったために、測量結果による現況と発掘成果との組み合わせになっているが、概ね古墳の規模は理解できると思う。測量調査と踏査の結果では、墳丘第二段から上には段が明確にみられなかったことから、従来から指摘されているように、現況の判断では二段築成の円墳と考えられる。

2. 墳丘上の石（付図）

本古墳では葺石は確認できなかった。墳丘第二段南西部の裾において、10～20cm角程度のチャートの割石がまとまって散乱していた。さらに人頭大の大きさで岩舟石と呼ばれる安山岩質角礫凝灰岩もほぼ同じ位置で確認された。また、この周囲をボーリング棒で探査したところ、チャート割石群の少し上の墳丘で石が集中して埋まっていると判断される部分があった。これらの事実から、墳丘南西部にチャートなどを用いた、割石積みの石室があると推測された。

第2節 周濠

墳形や古墳の規模を明らかにするために周濠に5箇所のトレンチを設定した。このうち、1・2・5トレンチは周濠の規模などを解明することを目的として、3・4トレンチは墳形と周濠・古墳の規模を確認するために設定した。ここでは、各トレンチの調査結果を述べていきたい。

1 トレンチ

本トレンチは墳丘の北西部に設定し、幅2.1 m、長さ18.0 mで、このうち周濠の埋土を掘り下げたのは幅0.8 mである。周濠確認面はソフトローム上面で、トレンチの南端から9.1～10.3 mの位置が周濠の外周上端であった。遺構確認面から調査した範囲で最も深い所まで深さ1.1 m、現表土からの深さ1.95 mであった。底面は軟質・粘土化したローム層まで掘り込んでおり、概ね平坦であったが、墳丘側に向かい20 cmほど低くなっている。外周壁の立ち上がりは急角度で、約40°の傾斜であった。一部、地山との境が不明瞭であったために、外周壁にトレンチの深掘りを行った。

周濠の埋土は、褐色土・明褐色土・黒褐色土などからなる。特徴のある土層では、浅間B軽石と考えられる砂質層が確認された。その降下年代は天仁元年(1108)であり、底面から20～60 cmの高さの位置でみられ、墳丘側の方が低いレベルから出ている。このことから、古墳築造後、ほとんど周濠の埋没が進んでいなかったことがわかった。土層は全体的に自然堆積の様相を呈していた。

2 トレンチ

本トレンチは墳丘西側に設定し、幅1.8 m、東西長17.9 mで、このうち周濠の埋土を掘り下げたのは幅1.0 mである。周濠確認面はソフトローム上面で、周濠の確認面での幅は13.6 mとなった。周濠の東側上端か

ら墳丘側は遺構確認面で平坦になっている。現在は削平されて畑になっているが、本来は墳丘第一段の盛土であったと考えられる。周濠の深さは確認面から1.45 m、現表土から1.64 mを測る。底面はほぼ平坦で、底の幅は6.7 m、軟質で粘質のあるロームまで掘っていた。西側の周濠外縁の壁は、下半部で45°程の傾斜で、上半部は15°程の緩やかな傾斜で立ち上がっていく。一方、墳丘側の壁は12°程の緩やかな傾斜であった、西側の壁と対照的である。

周濠の埋土は、全体に自然堆積したものと考えられ、黒色土・黒褐色土・暗褐色土などが主に確認できた。また、このトレンチでも浅間B軽石の層が1トレンチよりも明確に観察され、その層は周濠底面より20～25cm程浮いたレベルであった。最も低いレベルは1トレンチと同じであるが、周濠外周側の埋まり方が、1トレンチよりも遅かったことが想定される。なお、外周側に明確な周堤の崩落土と判断されるロームブロック層などは観察されなかった。

このトレンチから出土した遺物は、円筒埴輪片が大半であるが、層位としては土層図の3～5層において多く出土した。このため、図中8層が平安時代後期12世紀初めに埋没したと考えられることから、それ以降に多くの埴輪が流入したようである。

このトレンチの周濠外縁で、壁と底面の境において底面から5cm程浮いたレベルから土師器片が出土した。ほぼ周濠底面から出たことから、この周濠の掘削時期を反映する可能性が高い。

なお、本トレンチの周濠外縁際で径80cm、底面からの深さ30cmを測る遺構が確認された。大きさや形状から土坑か井戸とみられ、出土遺物は古墳よりも新しい須恵器である。

3 トレンチ

本トレンチは、墳丘の南側に設定し、南北9.9 m、東西7.5 mの平面台形に近い形状に掘り下げた。確認面はローム層上面で、トレンチの南側は周濠底面よりも深く攪乱が及んでおり、南東部のみで周濠の外縁が確認できた。トレンチの北部は、ロームの地山がごく緩やかに傾く。本トレンチの西隣に墳丘第一段の盛土が残っており、周濠の上端のラインが墳丘第一段の外縁のラインにのびることから、ここから北側は墳丘第一段の盛土であったと判断された。しかし、盛土と判断できる土層はなくて、トレンチ北部の平坦部にのる土は耕作の表土であった。

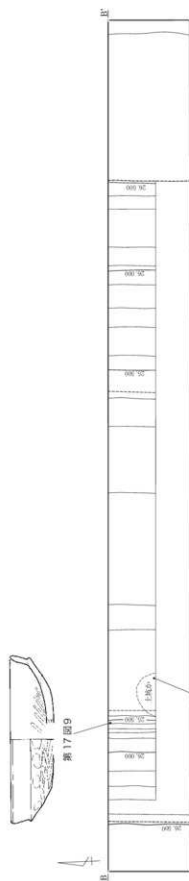
周濠の確認面における上端の幅は6.9 m、下端の幅は3.5 mであった。この幅は、本古墳の3・4トレンチ以外で確認できた周濠の幅の半分程である点が特徴である。現表土から周濠底面までの深さは1.6 m、遺構確認面からの深さは1.2 mであった。底面はほぼ平坦で、墳丘側の壁は30°程の傾斜で立ち上がるが、外縁側の壁は下半部で45°程、上半部で40°程の急傾斜であった。この部分は、底面と壁の境が明瞭であって、傾斜角度・境ともに、墳丘側の様相とは対照的である。そして、この傾向は、本古墳の他のトレンチでも観察された。

埋土は、ローム粒などを含む暗褐色土や明褐色土などであった。浅間B軽石は底面から50cm程浮いたレベルで確認でき、1・2トレンチよりも高い位置で確認できた。このことから、周濠の埋没が比較の早かったと考えられる。

遺物では、埴輪が主に浅間B軽石層よりも上の層から多く発見された。周濠の墳丘側の壁に接して、靱か盾形埴輪の破片が出土した。墳丘第一段に置かれたものが転落したと考えられる。

4 トレンチ

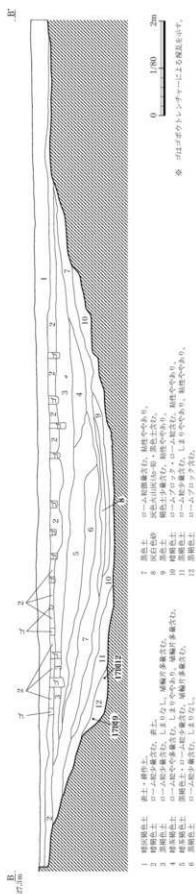
本トレンチは、3トレンチの東側に接している。当初、3トレンチに接して幅1.7 mの細長いトレンチを設定したが、墳丘立ち上がりを確認するために、面的に東側に拡張し、東西幅6.8～8.2 mのL字形のトレ



第17図9



第17図12

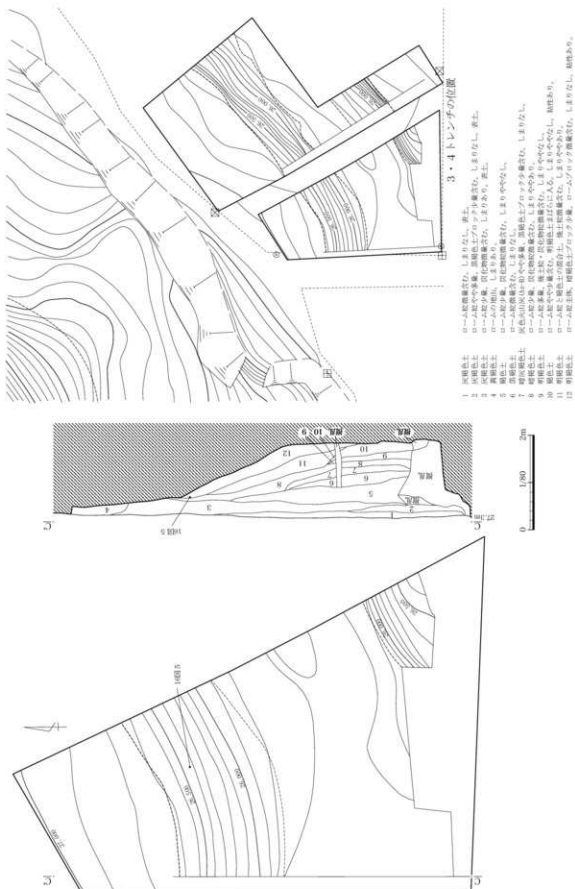


- 7 黒色土
8 灰白砂
9 赤色土
10 黒色土
11 赤色土
12 黒色土
13 赤色土

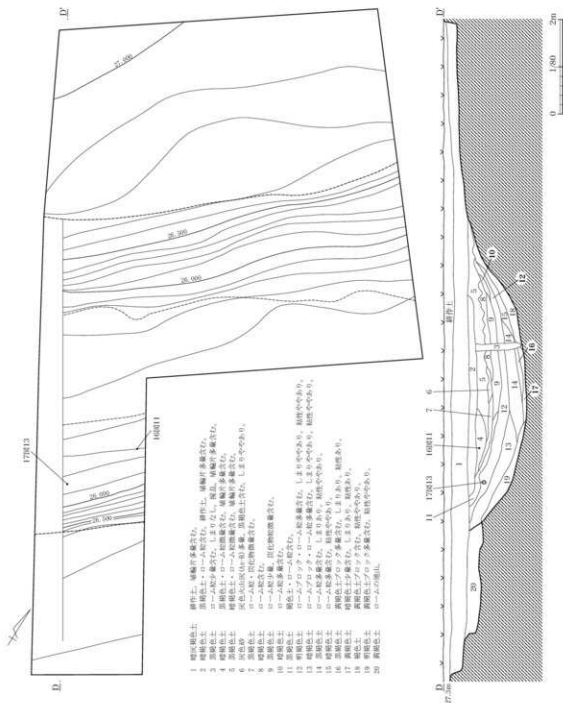
- 1 黒色土
2 赤色土
3 赤色土
4 赤色土
5 赤色土
6 赤色土
7 赤色土
8 赤色土
9 赤色土
10 赤色土
11 赤色土
12 赤色土
13 赤色土

※ 0はゴゼクトレンチーによる測定を示す。

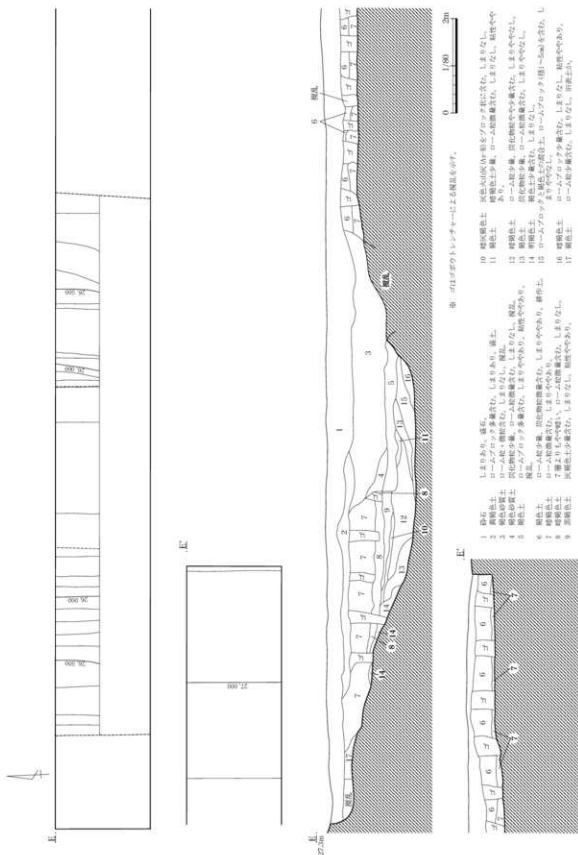
第6図 2トレンチ平面・土層・遺物出土状況図



第7図 3トレンチ平面・土層・遺物出土状況



第8図 4トレンチ平面・土層・遺物出土状況図



第9図 5トレンチ平面・土層図

ンチとなった。東側拡張部は墳丘立ち上がりを確認することを目的に、周濠外縁は調査しなかった。

その結果、この場所は帆立貝式の突出部の可能性があったが、墳丘側の周濠は緩やかな立ち上がりで、平面円形を呈していたことから、本墳が円墳であると考えられた。周濠の規模では、遺構確認面であるローム層上面での周濠の上端幅は6.5～6.6m、下端の幅2.0～2.4mであった。現表土から周濠の底面までの深さは1.75m、遺構確認面からの深さは1.2mを測る。底面は断面皿状であり、3トレンチと近い場所であるが、違いがみられる。墳丘側の壁は周濠下半部で30°程、上半部で20°程の傾斜で立ち上がる。外縁の壁は40°程の角度をもっており、墳丘側よりも急傾斜である点は、ほかのトレンチで観察できた様子と同じである。

埋土は、ほかのトレンチと類似して、暗褐色土や黒褐色土を主体にしており、全体的には自然堆積したものと判断される。壁際では褐色土などで、その崩落土と推測される。浅間B軽石層は図中6層であり、底面から70cm以上浮いたレベルであった。2トレンチでは底面から20～25cmであったことと比べると、平安時代末までの周濠の堆積過程が場所によって異なっていたことがわかる。なお、墳丘第一段にあたる部分の土層は、耕作土であって、盛土の様相は明らかでない。

本トレンチから出た遺物には円筒埴輪を主体に、人物埴輪の顔などもある。人物埴輪の顔の破片は、前述の浅間B軽石層よりも上のレベルから出土しており、平安時代末以降にこの場所に流入したことがわかる。また、埴輪の多くは、図中1～5層の周濠上層から出土しており、下層から出た破片は少ない。図中12層からは、9世紀代の須恵器高台付坏が出土し、この層は12世紀初頭の浅間B軽石層を含む6層よりも下層になることから、12層が9世紀代に堆積したと考えられる。

5 トレンチ

本トレンチは、古墳東側に設定した。幅2m、長さ21.8mの範囲で表土を除去し、周濠の幅を確認して、周濠の埋土は1m幅で掘り下げた。その結果、周濠の上幅11.4m、下幅3.4mであった。本トレンチは東側に長く調査することが可能であったので、二重周濠の可能性も考慮して延長したが、結果的に二重周濠ではなかった。周濠東側の立ち上がり付近では、攪乱が底面まで及んでいたが、底面の遺存していた部分から周濠の範囲を判断した。底面は平坦で、現表土からの深さ1.9m、確認面から1.2mであった。周濠壁の立ち上がり傾斜は、墳丘側が20～25°で、下半部の方が傾斜は急角度であった。東側外縁の立ち上がりは壊されている部分が多いが、下半部で40°程の傾斜であった。墳丘側にはローム確認面で平坦面があったことから、現在の墳丘第一段よりも約1.5m東にのびていたことがわかった。図中17層はローム粒を少量含む褐色土であり、古墳築造時の表土であろう。トレンチを墳丘の裾にのぼしたが、攪乱が及んでいた。

埋土は、褐色土や暗褐色土が主体となっており、東壁側の15・16層は壁の崩落土、7～14層は自然堆積したものと判断した。なお、地元の方の話では、以前はこの場所は埋まらない堀であったという。図中3～5層には現代の金属製品などが含まれており、このことを裏付けた。10層は、ほかのトレンチでも確認できた火山灰層であり、底面から40cm程浮いたレベルであった。

出土遺物は埴輪片が主体であり、ほかのトレンチと同様に、下層では出土数が少なかった。

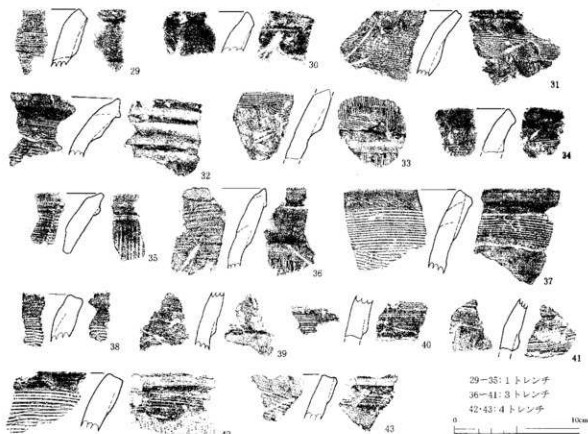
第3節 遺物

1. 周濠出土遺物

周濠に設定したトレンチからは円筒埴輪を主体に、少数の形象埴輪や土師器・須恵器・鉄製品が出土した。そこで、主な遺物について説明を加えていきたい。



第10図 トレンチ出土円筒埴輪実測図(1) - 口縁部 -



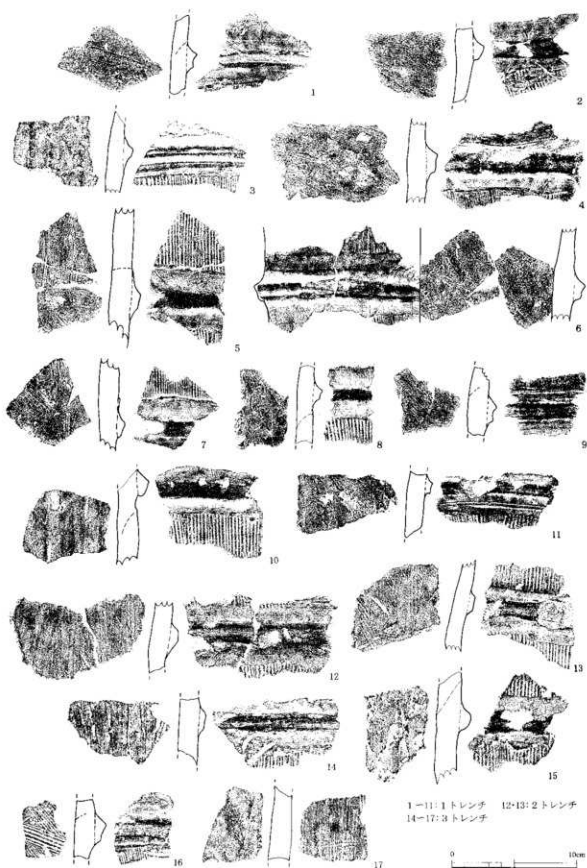
第 11 図 トレンチ出土円筒埴輪実測図② - 口縁部 -

(1) 円筒埴輪

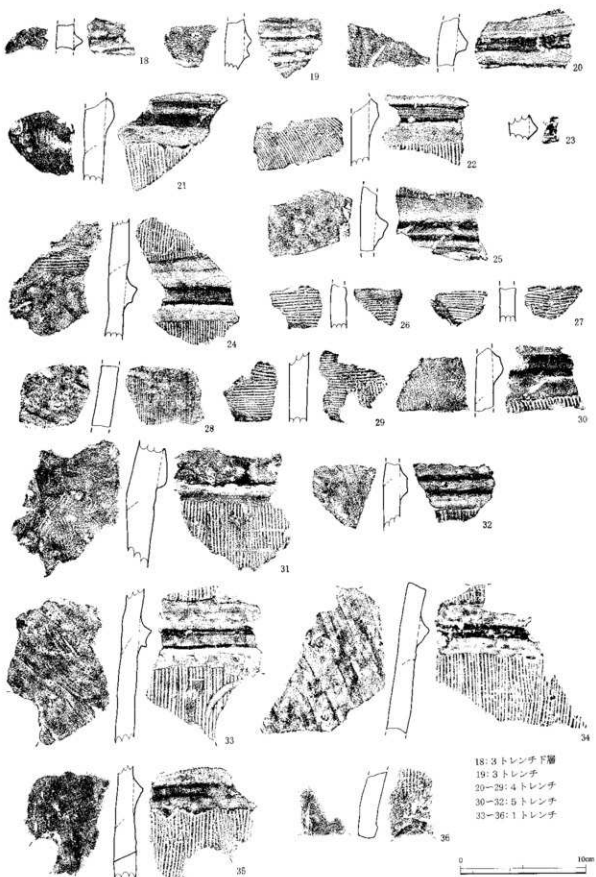
口縁部資料については、口縁部形態によって2類に分類できる。第10図1～28が口唇部に平坦面をもつもの（A類）、第11図29～43は貼り付け口縁と呼ばれるもの（B類）である。口縁部直下の技法では、第10図1は縦方向ハケメの後に2段の横方向ナデ、15・17・19・22・24・25・27は横方向の軽いナデを広く施している。その他の口縁部直下は縦方向のハケメになっている。23は横ナデの幅が長い点が特徴であるが、貼り付け口縁とは判断できなかった。26は横断面に彎曲が少なく、大型品か形象埴輪の可能性もある。また、厚さでは18がほかの埴輪に比べて薄い造りである。

貼り付け口縁では、外面に粘土を貼り付けた後に横方向にハケメを施すものと横方向のナデのものに分類できる。横方向ハケメのものは29・31・34・37～43、横方向ナデのものは30・32・35・36である。33は横ハケメの後に縦ハケメを施している。32については粘土接合痕をみると、口唇部下にも断面三角形の粘土を貼り、2.2cm程下にも帯状の平坦な粘土を貼り付けている。35は一般的な貼り付け口縁とは異なるが、口唇部下にも断面蒲鉾状の粘土を貼ったとみられる。42は縦方向にハケメを施した後に粘土の帯を貼り、この上に横方向のハケメを行っている。

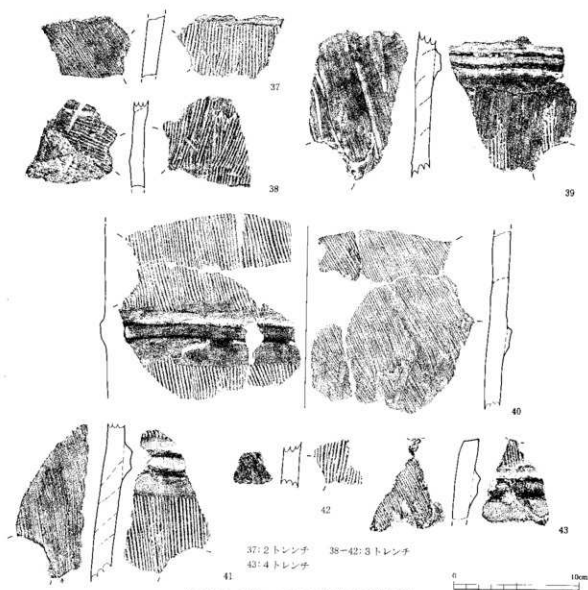
第12～14図は中位の資料であるが、今回の調査で出土円筒埴輪が小破片であるために、突帯の段数は明らかでない。径の復元できたものでは、第12図6は約1/6周遺存したものからの復元で、突帯径26cmであった。同様に約1/6周遺存する破片から復元した40は突帯径32cmであった。突帯は、断面台形を呈するものが主体であるが、第12図7・18・23・34のように断面三角形になっているものも少数であるが確認できる。また、5・31のように突帯の幅が広いものも散見された。



第 12 図 トレンチ出土円筒埴輪実測図(3)



第13図 トレンチ出土円筒埴輪実測図(4)



第14図 トレンチ出土土円筒埴輪実測図5)

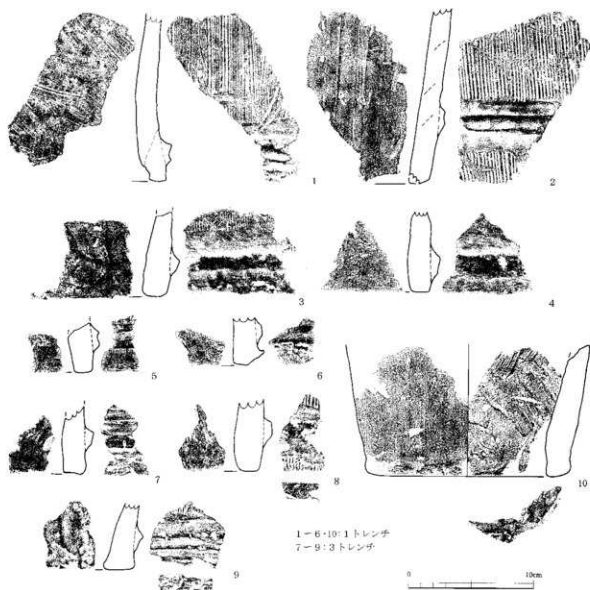
外面のハケメは、縦方向のものがほとんどであるが、第13図26・27・29では横方向のハケメが観察された。26では遺存する下端が横ナデ、29は縦方向の後に横方向にハケメを施す。ハケメの細粗では、多くは粗くて1cmあたり4～6本ほどの条線であるが、17は15本程あって細かな目の工具を使用している。39は粗目の工具で調整した後に、目の細かな工具で仕上げている。

透かし孔は円形のみ確認でき、第13図33～第14図43までに示した。33では円孔の周囲に弧状のナデがみられるが、窪みの断面が浅いことから沈線ではない。35は外面の孔径が大きい、内面は小さくて斜めに孔を空けている。

第15図は基底部の埴輪を集めた。1～9は低位置突帯（註1）で、多くは基部に近い位置に突帯を付けているが、2は基部から突帯まで離れている。1と8は色調が紫褐色・灰色の須恵質である。10は基部付近に突帯のない埴輪で、外面は目の細かな工具、内面は粗い工具で調整している。

（2）朝顔形埴輪

第16図1～3は突帯のカーブなどから朝顔形埴輪と判断した。外面には幅の広い突帯があり、内面は斜



第15図 トレンチ出土円筒埴輪実測図(6) - 底部 -

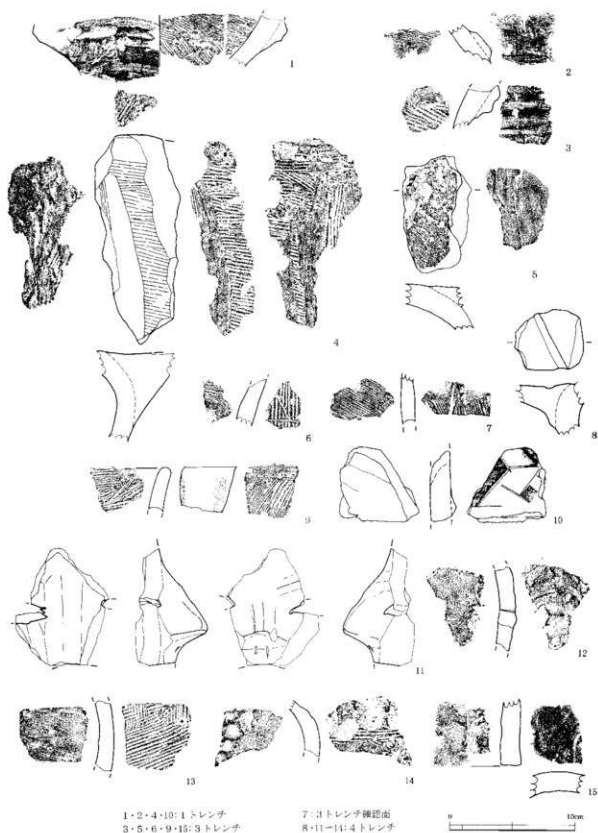
方向にハケメが観察される。

(3) 形象埴輪

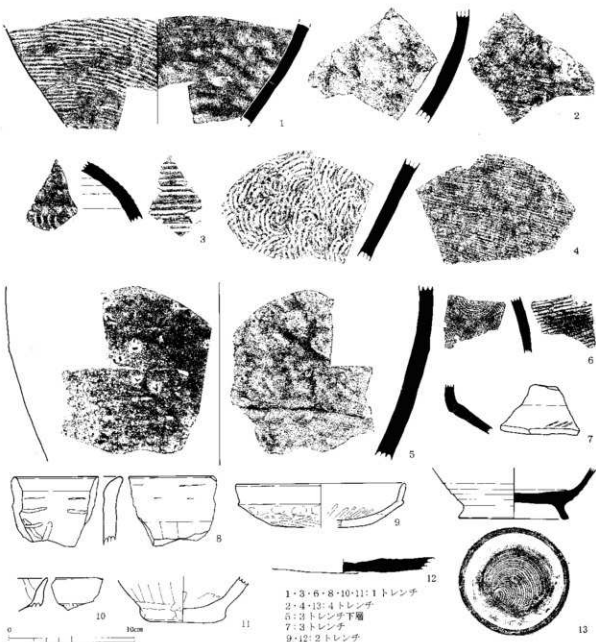
第16図4は鞍形埴輪で、鰭の肩の部分と推定される。上端にはハケメがあり、さらに横にのびていたとみられる。図中実測図の左側の拓影は円筒部の内面、実測図最も右側は鰭の裏面の拓影である。ハケメの後にナデを施している。5は盾か鞍の破片で、前面は斜方向ハケメ、円筒部内面はナデである。6・7には沈線があり、8は棒状工具で幅広沈線を引く盾であろう。9は片方の面に赤彩で線を書いている。10は平坦面に綾杉文を表し、赤彩している。11は人物埴輪の顔面で、目は半円形に切り込んでいる。鼻の下には棒状工具で沈線を引き、穴を表現している。口の上端は残っている。12は弧状に粘土が剥離しているが全体の形は不明で、15の内外面はともにナデている。

(4) 土師器・須恵器

第17図1は須恵器甕の胴部で、約1/4周遺存している。外面は平行叩き、内面は無文当て具痕で、古

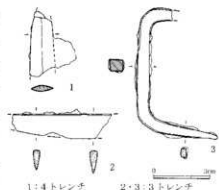


第16図 トレンチ出土朝顔形埴輪・形象埴輪実測図



第17図 トレンチ出土土師器・須恵器実測図

墳よりも新しいものの可能性がある。2と5は同一個体とみられ、外面は平行叩きで、黒褐色の自然釉が付着し、内面は無文当て具痕である。5は1/8周程の破片から復元した。6は内面に線の細い同心円当てで具痕がある。7は短頸壺に似ており、胴部外面は平行叩き、頸部と内面はクロコナデである。9は土師器甕の口縁部破片であり、胴部内面はミガキ、外面はナデである。9は2トレンチ周溝外縁の底付近から出土土師器環で口縁部～底部が1/4周残る。口縁部外面から底部内面は横ナデ、底部内面には放射状のミガキ、外面の口縁部下は無調整で押圧痕・粘土接合痕がある。底部はヘラケズリ、内外面全面に漆仕上げしている。10は土師器環の口縁部破片、



第18図 トレンチ出土鉄器実測図

12は2トレンチ内の土坑か井戸から出た須恵器甕の底部で、三甕窯産であろう。13は4トレンチの埋土から出た須恵器高台付坏で、底部外面に回転糸切り痕があり、三甕窯産である。

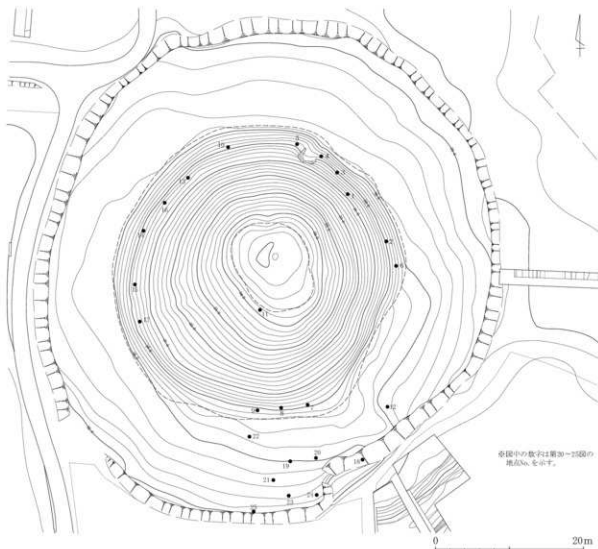
(5) 鉄製品

周埴埋土掘り下げ中に鉄製品の破片が出土し、鉄鎌・刀子・鋸であった。第18図1の鉄鎌は両丸造り、鎌身の長い点特徴で、鑿箭式の鎌身である。鎌身の一边に錆が付いている。2の刀子は刃部破片で切先と茎側を欠き、丸棟である。

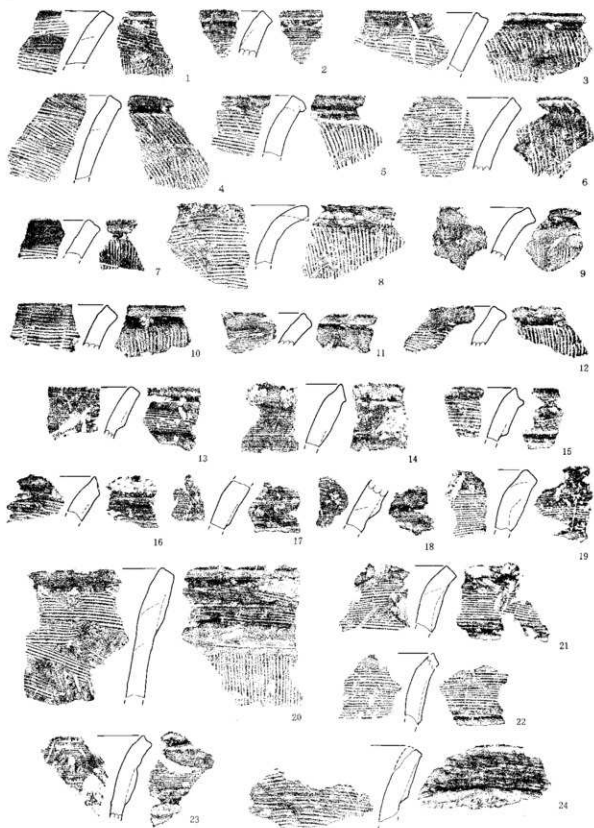
2. 墳丘採集遺物

測量調査などのために、墳丘に繁茂する木を伐採したところ、墳丘の表面に埴輪片が散在していた。そこで、これらの位置を記録して採集した。多くは墳丘第二段の斜面・裾から採集されたものであり、1点のみ形象埴輪片（馬形埴輪の足などか）が埴頂南西部で発見された。また、墳丘第一段では時間的制約により全ての表面を調査できず、表面採集は墳丘南側に限られた。

墳丘第二段において採集した埴輪は、本来埴頂などに樹立されたものが転落した可能性が高く、表面採集でも埴輪の種類を復元できると考える。以下、主な遺物について説明していきたい。



第19図 墳丘埴輪採集位置図



No. 2地点: 1・3・13・14・16~18

No. 3地点: 19・20・22

No. 5地点: 21

No. 6地点: 4・5・23

No. 9地点: 24

No. 14地点: 6

No. 15地点: 7

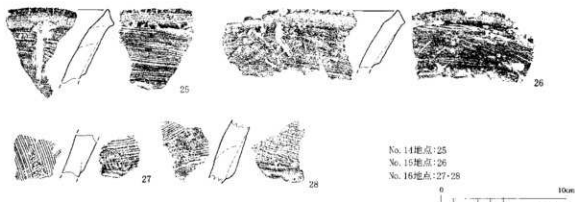
No. 16地点: 8

No. 17地点: 15

墳丘上: 9~12

第20図 墳丘採集円筒埴輪実測図(1) - 口縁部 -





第21図 墳丘採集円筒埴輪実測図② - 口縁部 -

(1) 円筒埴輪

第20・21図は、円筒埴輪の口縁部を集めた。表採遺物でもトレンチ出土品と同じく、口唇部に平坦面を有して、単口縁といえるもの（A類）と口唇部に帯状の粘土を貼り付けるもの（B類）に分類できた。A類は1～12、B類は13～28である。

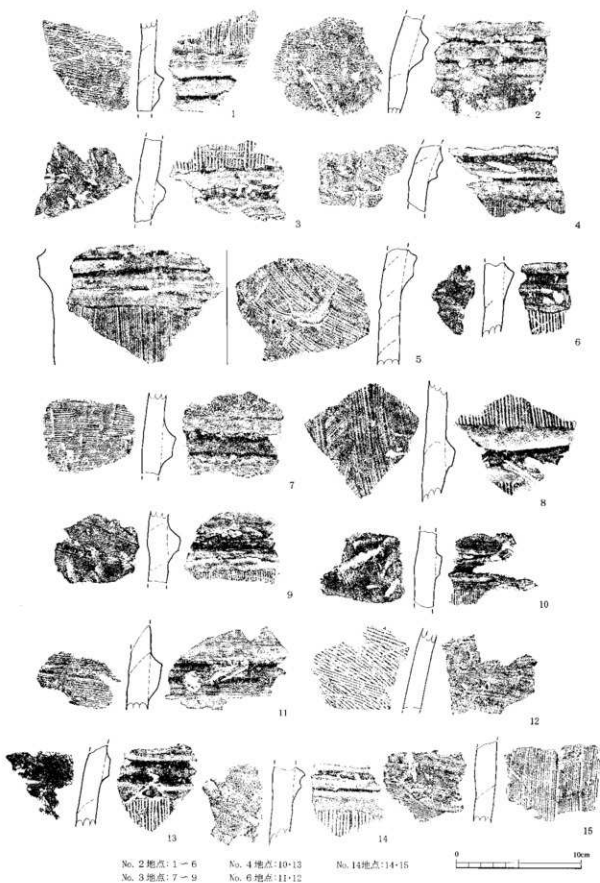
1は口縁部外面に縦方向ハケメの後に横位に近い斜方向のハケメを施している。トレンチ出土品を含めても単口縁での稀有な事例である。2は遺存する部分では外面に横方向ハケメがあるが、下位の方が厚くなっており、貼り付け口縁の可能性も残る。口縁部直下にはナデの行われるものがあり、3・4・6・7・11で確認できた。5は口唇部外面に粘土が折り返したように付いており、8は口縁部が大きく外反している。

貼り付け口縁は、貼り付けた平坦部の幅が広くて、口縁幅のわかるもので2.7～4.7cmまでの長さがあり、平均で3.7cmであった。製作技法では、粘土帯下位の方は厚めで上位は薄くなっている。いずれも口縁部外面に横方向ハケメを施しているが、第21図27では帯状の粘土を貼り付けて縦ハケメの後に、横ハケメを行っている。さらに、14・18・24・26は横方向ハケメの後に横ナデを行っている。このように、微細であるが、貼り付け口縁の技法も数種類あることがわかった。ハケメの工具は概して目の粗いものが多いが、23などは細かな目である。内面はいずれも横方向ハケメである。色調は、大半が明褐色であるが、3・8・28は灰色の還元色である。

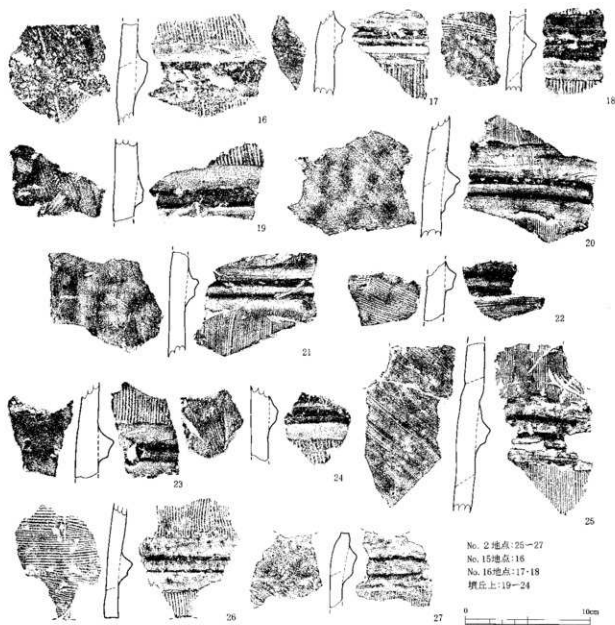
これら単口縁のA類、貼り付け口縁のB類ともに、墳丘第二段の裾で第一段との境から1m程上のレベルから採集されている。このため、両方の口縁部形態の円筒埴輪が墳頂部を含めた墳丘第二段に樹立されていたことがわかる。

中位の資料は第22・23図に掲載した。約1/6周遺存し、径の復元できた第22図5は、突帯径で29.8cmであった。突帯は断面台形を呈するものが主体であるが、中央が窪みM字状をしているもの（4・14・21など）もある。また、断面三角形を呈するもの（6）もあるが、数は少なく客体的である。多くの埴輪のハケメは粗めで、最も粗い8では1cmあたり4本のハケメであった。12は外面が細かな横方向ハケメで、内面は粗い斜方向ハケメになっている。このため、内外面で調整する工具が異なっている。22は、外面に縦方向のちに横方向ハケメを施しており、本古墳でも稀な技法である。16は外面にヘラ描きの沈線がみられ、波状の文様などの可能性がある。

25～27は透かし孔のある埴輪である。25は円形の孔とみられ、その脇に弧状のナデがあるが、穿孔の際についてのものであろうか。色調は、多くが明褐色・橙褐色であるが、5・14・25は灰色の還元色を呈している。



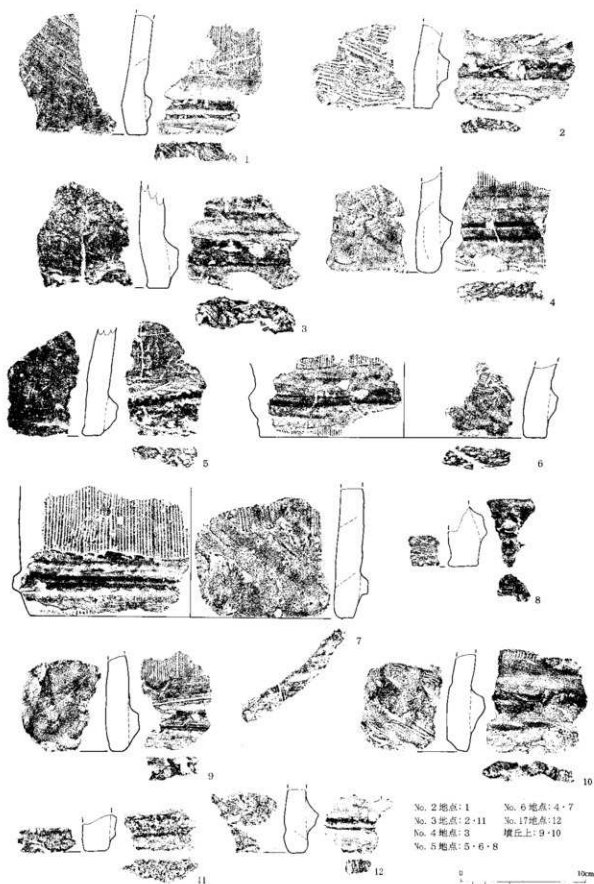
第22図 墳丘採集円筒埴輪実測図③



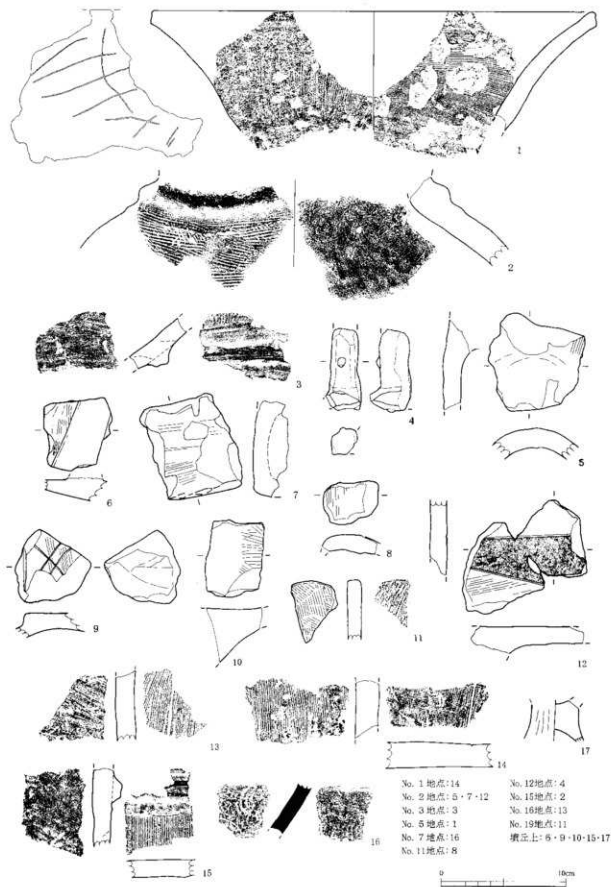
第23図 墳丘採集円筒埴輪実測図[4]

基底部の資料は第24図に示した。いずれも基底部の直上に突帯を貼る低位置突帯である。径を復元した6・7は基底部が1/6程遺存する破片であり、6は基底部径22.6cm、7は25.4cmを測る。突帯の断面形は台形で、裾広がり度で幅広いものが多い。4・6・7・8は底面際までハケメが及んでいるが、その他はナデでハケメはみられない。内面は基底部まで斜方向ハケメがされている2・5・7があるが、斜方向にナデを加えるものの方が多く傾向がある。ハケメは粗いもの多くて、2では1cmあたり3〜4本の条線である。

底面には圧痕がいずれの埴輪にも観察されたが、1には木目とみられる条線があり、板の上で成形・調整したか、乾燥させた可能性が高い。6は底面に粘土接合痕が斜めに観察され、基底部粘土を棚代のように重ねて接合していたことがわかる。粘土紐も上下幅は2.7〜5.3cm前後までであるが、4cm程のものが多いことが断面や内面の粘土接合痕の観察によって明らかになった。色調は、1・4・6が硬質で、灰色・灰褐色の還元色である。その他のものは明褐色や橙褐色をしている。



第24図 墳丘採集円筒埴輪実測図(5) - 基底部 -



第25図 墳丘採集朝顔形埴輪・形象埴輪・土師器・須恵器実測図

胎土には全体的な傾向であるが、白色・灰色のチャート質で径2～3mmの粗粒をやや少量、径1mm程の赤褐色粒、1mm程の細長い黒色物（角閃石か）、0.5mm以下の白色細粒などを少量含む。

図化した低位置突帯の埴輪は、多くが埴丘第二段の裾・斜面において、第一段平坦面よりも1m程高い位置で採集された。このために、この埴輪群は埴頂を含めた埴丘第二段に置かれていたものと想定することができる。

（2）朝顔形埴輪

埴丘採集品で、朝顔形埴輪とみられる破片3点を図化し、第25図に示した。いずれも埴丘第二段の斜面で採集したもので、2は埴丘第一段から1.4m程上がった第二段の部分にあった。このため、これらは埴頂などにあつたものと考えられる。1には線刻がある。彫りが浅くて、焼成が良くないが、焼成前の線刻であろう。絵画とみられるが、その内容は明らかでない。2は灰褐色をした硬質のもので、肩から括れ部が1/5周程遺存する。外面は斜方向の後に横方向にハケメを施し、内面はナデである。3は頸部の突帯で、断面台形の突帯を貼る。

（3）形象埴輪

4は美豆良の破片で、下半は芯になる棒状粘土の表面に粘土を貼っている。また、下端突出部の上には径6～8mmの粘土粒を付ける。埴丘第一段南側の部分で採集した。5は人物の脇などであろうか、外面は縦方向のハケメの後にナデや粘土を貼っている。埴丘第二段の東側斜面で採集した。6は縦方向ハケメの後に、幅3cm程の粘土を斜めに貼っている。7は断面弧状の粘土の表面に粘土をはり、表面・側面を平坦に仕上げしており、埴丘第二段の東側斜面で採集した。8は径10cm程度に復元される円筒状のもので、馬形埴輪の円柱部などの破片であろうか。埴頂の南西部において採集した。9は表面にクランク状の段があり、平坦面に斜格子文を描く。10は盾か鞆の破片であろう。表裏面は横方向にハケメ、図中左側の面は剥離面である。11は側縁が弧状を呈し、板状に扁平で、盾形の頂部であろうか。埴丘第一段南側の部分で採集した。12は板状で、扁平な面に沈線を引き、この間を赤彩する。裏面は直線状に剥離面があることから、盾形の鰭の部分であろうか。埴丘第二段の東側斜面で採集した。13・14は扁平な板状で、直線状の沈線を引く。13は埴丘第二段の北西部斜面、14は東側斜面で採集した。15は遺存する短軸断面も彎曲がなく、板状であることから家形埴輪などであろうか。

人物埴輪や器材埴輪は、採集品であることからいずれも小破片である。図化した4の美豆良を付けた人物埴輪は埴丘第一段のテラスにあつたか、埴頂にあつたか確定できないが、その他の盾形埴輪など埴丘第二段の斜面にあつたものの多くは、埴頂などに置かれていたと考えられる。

（4）須恵器・土師器

16は埴丘第二段の南斜面で採集した須恵器甕の胴部破片で、外面は平行叩き、内面は同心円当て具痕である。17は土師器高杯の脚部上半の破片である。

註

1. 基底部近くに突帯を付けるものについて、最初に注目された森田久男・鈴木勝氏は「低位置凸帯埴輪」と呼称したが（森田・鈴木1980）、近年では「低位置突帯埴輪」と表記されることも多く（新山2007）、この表記によっておきたい。

第4章 調査の成果

第1節 甲塚古墳の墳形・規模・時期と類例

甲塚古墳は、これまで円墳か帆立貝式古墳かと考えられてきたが、南東の突出部と推測される部分を面的に確認したところ、墳丘側の周濠に突出部が確認されなかったことから、本古墳は円墳であると判断した。規模については墳丘第一段下端径で78.1m、周濠外周上端径94.8mであった。しかし、周濠は南側で狭くて、トレンチで確認した部分と周濠が地割りで残っている北東部など、そのほかの部分では近似した幅であった。この点については、調査範囲が限られていたことから不確実な感を残す。

次に、本古墳の時期について検討する。周濠西側の底面近くから土師器環が出土した(第17図9)。この環は、口径と丸味の少ない扁平なものでないことからTK-209段階よりも古い(梁木・田熊1989・津野1995)。この環は口径部の長さがやや短く、外反が少ないことから、池田敏宏氏のエリアⅢのⅢ期に当たる(池田2009)。以上の点から、この土師器環の時期を6世紀末よりも古い6世紀後葉の所産と判断し、これが本古墳の築造時期の一端を反映すると考えられる。

次に、甲塚古墳に類する後期の大型円墳について、都賀郡域の西部から安足地区(栃木県南西部)における類例をみえる。後期から終末期の大型円墳については、下野市から壬生町・上三川町周辺地域の様相については、これまでも県内外の研究者各氏によって変遷や意義付けがなされてきた。しかし、甲塚古墳のある岩舟町域を含めた県南西部の大型円墳の意義付けについては、未着手というのが現状ではないだろうか。

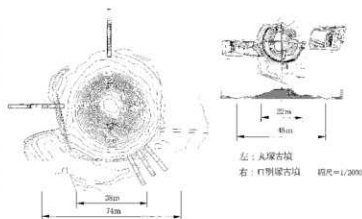
岩舟町小野黒根3号墳は墳丘径50m、高さ4～5mの円墳であるが、調査されておらず詳細は不明である。

佐野市域での十二天塚古墳(山越1979・佐野市教育委員会1988)は墳丘径45m、周濠径97mの円墳で、蓮沼古墳群の主墳または、複数の小古墳群の赤見古墳群を含めた中心的な古墳とする考えがある(上野川1992)。この古墳には墳丘第一段の平坦面は確認されておらず、普通円筒埴輪輪が出ている。報告の中で斎藤弘氏は、6世紀前半後葉から後半前葉に位置付けている。

足利市域では、海老塚古墳が墳丘径53m、内側周濠幅14～15m、外側周濠幅4mの二重周濠の円墳と指摘され、復元すると周濠外径で90m程の大型円墳になる。墳丘第一段は幅10～14m、墳丘第二段は径約20mと復元されている(前沢・橋本1981)。横ハケメの円筒埴輪輪や小札などが出土しているが、普通円筒埴輪のみ確認されている。

足利市口明塚古墳は三段築成の円墳で、周濠外径約56m、墳丘第一段の径約48m、墳丘第二段の径約22m、墳丘第三段の径15m以上とされており、墳丘第二段と第三段には葺石があった。普通円筒埴輪輪が大半であるが、一部低位置突帯埴輪輪も含まれている。6世紀末から7世紀初頭に位置付けられている(市橋ほか1996)。

県南西部における後期の大型円墳は



第26図 墳丘第一段・第二段の幅

小地域の首長墓として存在し、足利市域では正善寺古墳（前方後円墳）、海老塚古墳、口明塚古墳という首長墓系列が指摘されている。墳丘第一段を有するこれら大型円墳が6世紀後半から7世紀初頭の間に地域首長墓間に採用されていたことがわかる。壬生町・下野市から上三川町域において、この時期には前方後円墳を主体として、壬生町富士山古墳などの大型円墳も一部に採用されていた。このような栃木県南部域の中核となる勢力に比べて、岩舟という外縁地域では円墳が首長墓に採用されていた。そこに、外縁地域の首長層墳墓への規制と墓制の共有化が窺える。また、甲塚古墳主体部の石室にはチャートや安山岩質角礫凝灰岩（岩舟石）を使用し、切石でなく、中核部の様相と異なり、外縁地域の個性といえる。

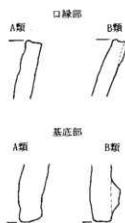
次に、墳丘第一段と第二段の比率から円墳の規格についてみる。甲塚古墳の墳丘第二段／墳丘第一段は $39\text{m} / 78.1\text{m} = 50\%$ 、海老塚古墳は $20\text{m} / 53\text{m} = 38\%$ 、口明塚古墳は $22\text{m} / 48\text{m} = 46\%$ である。中核地域の壬生町・下野市域では富士山古墳は $55\text{m} / 80 \sim 86\text{m} = 69 \sim 64\%$ 、桃花源古墳 $31.5\text{m} / 63.0\text{m} = 50\%$ 、車塚古墳は $52\text{m} / 82\text{m} = 63\%$ 、丸塚古墳は $38\text{m} / 74\text{m} = 51\%$ 、岩屋古墳は $35\text{m} / 61\text{m} = 57\%$ などとなっている。丘陵上に築かれた富士山古墳を除き、墳丘第一段・第二段の径（基底部径）の比率を測ると、多くが第二段は第一段の50%ほどの径になっている。これが大型円墳の墳丘規格と判断され、本古墳もその規格に従っている。外縁地域の首長層への墳形規制とともに、墳丘第一段の平坦面を造り、第二段との比率も規格化されたもので設計したと考えられる。

第2節 出土埴輪の傾向と唐沢山ゴルフ場埴輪窯との関係

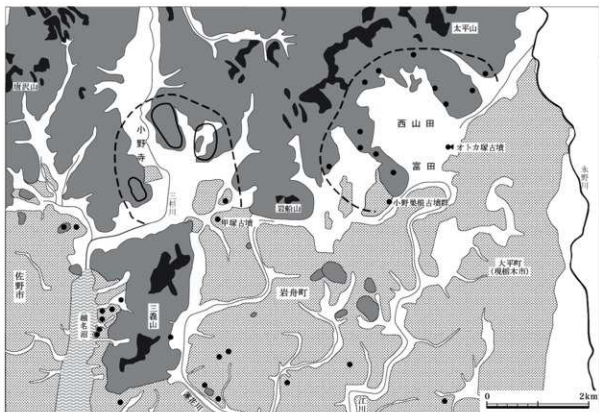
今回の調査は、主に周濠の範囲確認調査であったが、その埋土内や墳丘における表探で一定数の埴輪を得ることができた。墳丘第一段の平坦部や墳頂を調査していないので、全体の様相は不明であるが、現在での傾向をまとめておきたい。円筒埴輪については、単口縁の円筒埴輪（A類）はトレンチ内と墳丘での表探品を含めて72点であるが、貼り付け口縁（B類）は35点にすぎなかった。一方、低位置突帯の有無による分類では、低い位置に突帯のないもの（A類）は1点のみであったが、低位置突帯の付くもの（B類）は28点であった。特に、墳丘の表探品は低位置突帯埴輪のみであり、墳頂を含めた墳丘第二段には低位置突帯埴輪が主に樹立されたことが推定された。貼り付け口縁の円筒埴輪は、全体の形のわかる事例が極めて少ないが、壬生町富士山古墳で貼り付け口縁で低位置突帯が付いたものと、単口縁で低位置突帯の円筒埴輪が確認された。このため、低位置突帯が主体で、単口縁と貼り付け口縁が併存する甲塚古墳の様相は、富士山古墳で確認されたことに一致している。径の復元できたものでは、低位置突帯のないもので基底部径16cm、

低位置突帯の付くものは径25cm・27cm程で、こちらの方が大きい。また、中位の資料でも径26cm・32cm程で低位置突帯のものの径にあたる。この傾向によって、本古墳では径の大きな円筒埴輪を主に樹立していたと推測される。この様相は、近隣にあるムジナ塚遺跡の墳丘最大長約30mの2号墳（帆立貝式）・3号墳（前方後円墳）で、円筒埴輪に貼り付け口縁や低

出土位置	口縁部		基底部		合計
	A類	B類	A類	B類	
1 トレンチ	8	7	1	8	24
2 トレンチ	1			1	1
3 トレンチ	25	6		4	35
3 トレンチと4 トレンチの間	1				1
4 トレンチ	10	2			12
墳丘表探 No. 2	8	7	4	4	19
墳丘表探 No. 3			4	2	6
墳丘表探 No. 4				1	1
墳丘表探 No. 5			1	2	4
墳丘表探 No. 6	6	2		2	9
墳丘表探 No. 9	2	1			3
墳丘表探 No. 14	1	1			2
墳丘表探 No. 15	3	1			4
墳丘表探 No. 16	1	2			3
墳丘表探 No. 17		1		2	3
墳丘上	7			2	9
合計	72	35	1	28	136



第27図 円筒埴輪口縁部・基底部の分類と点数



第 28 図 岩舟町域周辺の地域勢力

位置突帯がないことと対照的である。この事実により、この地域では貼り付け口縁・低位置突帯埴輪が、埴形よりも大型古埴に樹立される埴輪であることを示している。

本古墳の埴輪は唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡の製品であることが以前から指摘されていた。この点は、自然科学による胎土分析でも甲塚古墳の埴輪は、 $K(0.426 \sim 0.467)$ 、 $Ca(0.105 \sim 0.175)$ 、 $Si(0.371 \sim 0.464)$ 、 $Rb(0.359 \sim 0.523)$ であって(三辻 1998)、この分布は唐沢ゴルフ場埴輪窯の試料の分布域にあてはまり(三辻 1996)、甲塚古墳の埴輪が唐沢山産であることを裏付けた。

ところで、唐沢山ゴルフ場植輪窓跡では、土師器帯が5号址と7号址から出ている。この帯は各氏の編年ではTK-209段階に当たり、6世紀末から7世紀初め頃に比定される。この年代を唐沢山窓の時期の一端とすると、甲塚古墳の時期よりも少し新しくなるであろう。このため、唐沢山の植輪窓の5号・7号址段階よりも古い時期の植輪窓があり、ここから甲塚古墳に供給されたことが想定される。

第3節 地域勢力としての甲塚古墳

これまで、岩舟町域における古墳群に関しては、発掘調査された古墳が少ないこともあつて、地域の動向の中で注目されることも少なかった。そこで、第2図をみると、岩舟町域では大型の古墳の分布は、町域東部から旧大平町北部・富田・西山田にかけての地域と甲塚古墳を含む町域西部に分けられる。

岩手東部・大平北部地域では、主墳となるのは時期が不確定であるが、前方後円墳のオトカ塚古墳・大型円墳である小野黒根3号墳であろう。両古墳の立地する位置は、大平山麓からのびた尾根で袋状になった西山田の盆地の開口部にあたる。栃木県域でも横穴式石室導入期にあたる中山（将門霊神）古墳や小野黒根3号墳など6世紀前半から造墓が始まり、6世紀後半には盆地縁辺の山裾に白岩7号墳などが造られる。

岩舟西部地域では、主墳にあたるのは甲塚古墳が最初である（註1）。この次の段階が周径径54mに復元される駒塚古墳で、7世紀前半を上限とする。この地域の首長墓系列のもとに新里の新屋敷遺跡・三谷仏手内遺跡・上岡三谷遺跡の古墳群や古江の山の鞍部にある古墳群などが、横穴式石室をもつことから後期群集墳で、甲塚古墳・駒塚古墳の傘下にあったものと推定される。また、藤岡町の犬石古墳群なども同様であろう。このように、甲塚古墳・駒塚古墳の勢力は、岩舟町西部から一部旧藤岡町域に盤踞した小地域勢力であったと考えられる。その立地する位置は、岩舟町小野寺の盆地の開口部にあたる。この盆地を生産基盤とし、開口部を押さえている点は岩舟東部・大平北部地域の古墳群の様相と同じである（註2）。

甲塚古墳の性格は、墳形は円墳という規制を受けながらも、墳丘第一段をもち、栃木県南部中核の地域勢力の墓と造りと同じくし、墳丘比もその規格に則して造墓している。円筒埴輪は、群馬系の貼り付け口縁と低位置突帯のもので、6世紀中葉に群馬西部で出現したものが東漸して、栃木の主要な古墳にも取り入れられている。このように、甲塚古墳は本古墳のある地勢的特徴にも起因して、東西の墓・埴輪と地域の石室材を折衷した古墳といえるであろう。このような性格の被葬者が岩舟町西部、一部旧藤岡町北部を含めた小地域を支配していったものと推定される。

註

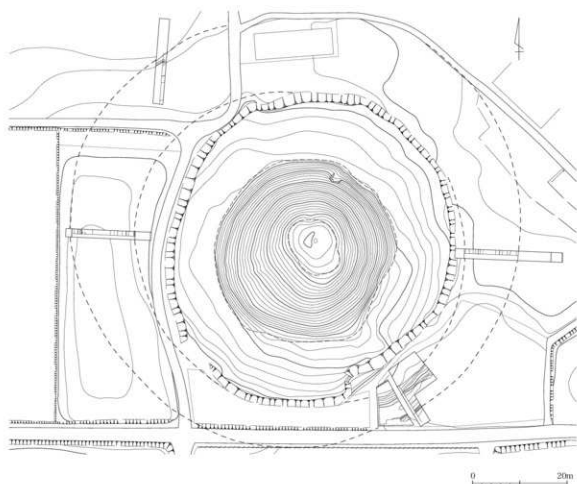
1 『紀元二千六百年記念古墳調査』（下部賀部教育会ほか1941）には、岩舟村大字下津原字手洗に全長200尺の前方後円墳（最終塚第12号墳）があると記載されている。今回、記載された地番を岩舟町教育委員会の御協力を得て現地を調査したが、後円部に当たる位置にチャードの地山が露出し、埴輪等はなかった。このため、現状では古墳と考えがたく、今後の確認調査などで明らかにしていくべきであろう。

2 岩舟東部・大平北部地域で、6世紀後葉に主墳となる古墳がない場合には、甲塚古墳がこの地域を含めた首長墓となる。小野集根古墳群などの時期検討が今後の課題である。

参考文献

- 池田敏宏 2009 「栃木県における6・7世紀の土器様相—地域間交流を中心視座にすえて—」『古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相—』六一書房
- 市橋一郎・大澤伸啓・足立佳代・斎藤和行 1996 『口明塚古墳発掘調査報告書』足利市教育委員会
- 大川 清 1963 『栃木県佐野市阿蘇山麓 古代集落遺跡』佐野市教育委員会
- 上野川 勝 1992 「安足地方の石炭岩横穴式石室を備えた後期群集墳について」『唐澤考古』11 唐澤考古会
- 君島利行 1998 『富士山古墳』壬生町教育委員会
- 小森紀男・松岡直貴・斎藤恒夫 1993 「国分寺町丸塚古墳第三次調査報告」『栃木県しもつけ風土記の丘資料館年報』第7号 栃木県教育委員会
- 佐野市教育委員会 1988 「市道1050号線改良工事地内遺跡発掘調査報告書 向原遺跡・産沼遺跡・十二天塚古墳」
- 下部賀部教育会・岡町村民会・岡小学校長会 1941 『紀元二千六百年記念古墳調査』
- 津野 仁 1995 「栃木県における6・7世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 新山保樹 2007 『栃木県出土の低位置突帯埴輪』『古墳文化』II 國學院大学古墳時代研究会
- 前沢輝政・橋本 勇 1981 『海老塚古墳』足利市教育委員会
- 三辻利一 1996 『佐野市内の埴輪の重光X線分析』『佐野の埴輪展』佐野市郷土博物館
- 三辻利一 1998 『富士山古墳出土埴輪の重光X線分析』『富士山古墳』壬生町教育委員会
- 栗木 誠・田熊清彦 1989 「古代下野の土器様相（1）」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会
- 山越 茂 1979 「十二天塚古墳」『栃木県史 資料編 考古2』栃木県

写真図版



甲塚古墳周濶・墳丘復元図



甲塚古墳全景（南から）



1 トレンチ全景（南西から）



2トレンチ全景（南東から）



1トレンチ土層（北西から）



1トレンチ全景（南から）



2トレンチ土層（南から）



2トレンチ遺物出土状況（東から）



3・4トレンチと墳丘（南から）



3・4トレンチ全景（北から）



3トレンチ全景（北から）



4トレンチ全景（北から）



3トレンチ土層（東から）



4トレンチ全景（東から）



3トレンチ土層（西から）



3・4トレンチ土層（南東から）



4トレンチ人物埴輪出土状況（北西から）



4トレンチ須恵器出土状況（北東から）



5トレンチ全景（南西から）



5トレンチ土層（南西から）



5トレンチ填丘側土層（南東から）

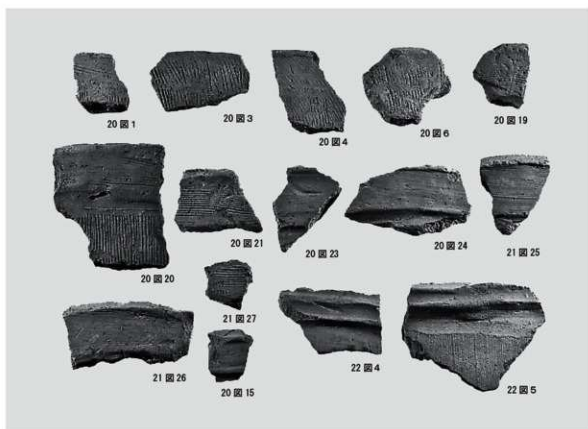
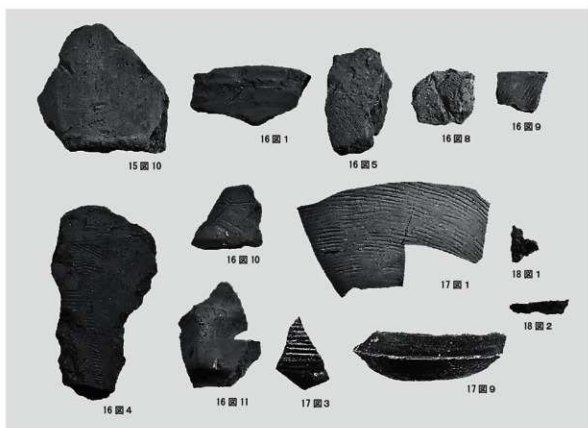


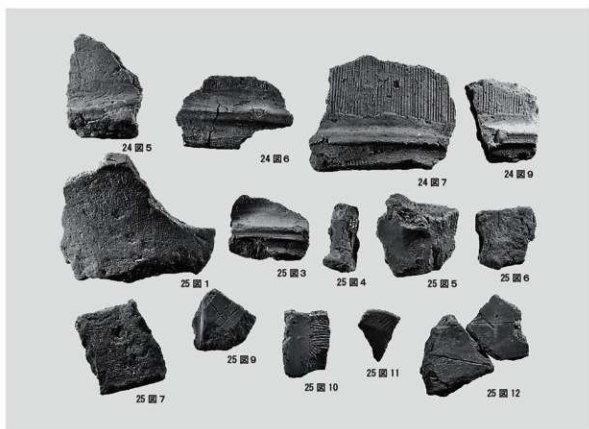
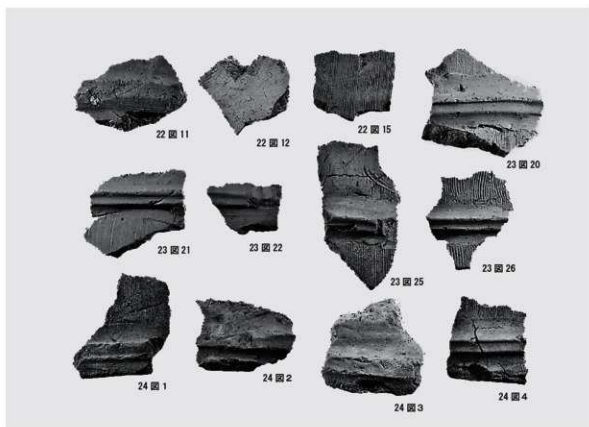
填丘裾割石露出状況（南東から）

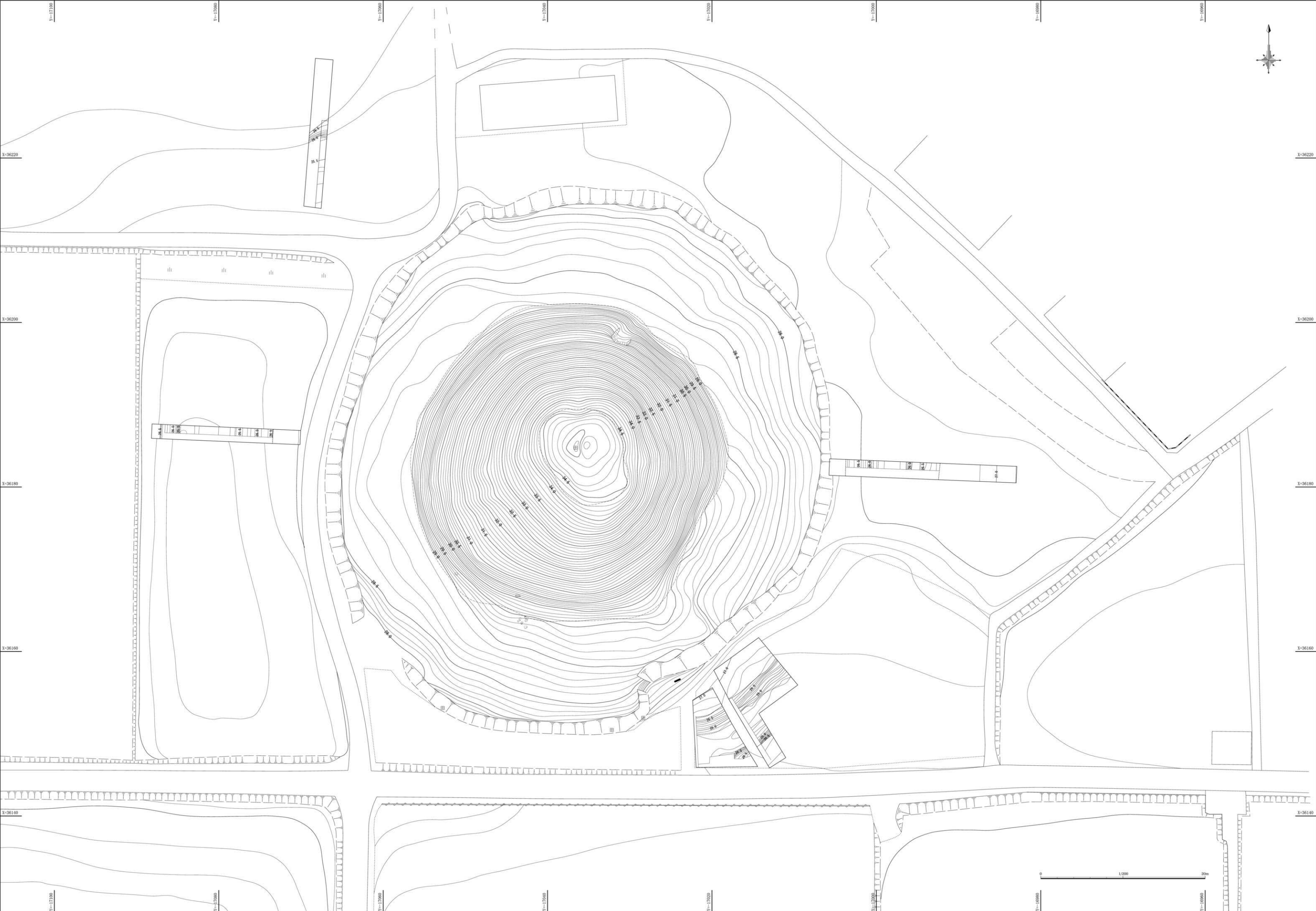


3・4トレンチ作業風景（西から）









付図 甲塚古墳測量図

報告書抄録

ふりがな	かぶとづかこふん						
書名	甲塚古墳						
副書名	重要遺跡範囲確認調査						
巻次							
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第343集						
編著者名	津野 仁						
編集機関	財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター						
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 Tn0285-44-8441						
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ未来づくり財団						
発行年月日	西暦2012年3月29日 (平成24年3月29日)						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° N	東経 ° E	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
甲塚古墳 かぶとづかこふん	下都賀郡 岩舟町 大字豊岡 しもつがたぐん いわふねまち おおきとみ	09367	6627	36° 19'28"	139° 38'375"	20120110 ～20120131	3650 ㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲塚古墳	古墳	古墳時代	周濠	円筒埴輪・形象埴輪・土師器・須恵器・鉄鍬	大型円墳の規模が判明した。

要約	これまで、発掘調査のされたことのなかった本古墳の測量・周濠トレンチ調査を行った。その結果、墳丘は第一段下端の径で78.1 m、周濠外周径で94.8 m、周濠底から墳頂までの高さ9.3～9.8 mで、墳丘第一段の平坦部をもつ、この地域の大形円墳であることがわかった。周濠から出土した土師器坏は6世紀末以前の後葉のもので、古墳の時期の一端を示す。周濠の埋土から出土した円筒埴輪や墳丘で採集したものには、貼り付け口縁や低位置突帯が多くて、基底部の資料は大半が低位置突帯であった。墳丘第一段の平坦部が存在し、貼り付け口縁や低位置突帯円筒埴輪が多く確認されたことは、本古墳が群馬県域や栃木県南部地域の古墳勢力中核地域と関係があったことを示すものである。また、本古墳は岩舟西部地域に分布する後期古墳群の主墳であり、駒塚古墳に継承されたと考えた。その基盤は岩舟町小野寺の盆地などを含むであろう。
----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第343集

甲塚古墳

～重要遺跡範囲確認調査～

発行 栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市埴田1-1-20

T E L 028 (623) 3425

財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

T E L 028 (643) 1011

平成24年3月29日発行

編集 財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

T E L 0285 (44) 8441

印刷 下野印刷株式会社
